

第2節 絵画土器・記号土器について

本書で報告する旧練兵場遺跡第28次調査7-2・7-7～9・7-13・14区からは19点の絵画土器または記号土器が出土した。また、同じく第28次調査の7-1・7-3～6区では2点の絵画土器または記号土器が出土した（表11）。第3章で、これらの遺物を遺構ごとに報告したが、集成して再度掲載する。

1. 絵画土器・記号土器

建物（1673）・建物？（1892）

7-7区で出土した土器片1673には建物が描かれている。1673は7-7区の南部を走る古墳時代後期から奈良時代の溝SD0704の埋土上層から出土した。SD0704の下層には、概ね弥生時代中期後半に埋没する河川（SR01）が存在することから、本来は河川埋土に埋没していた可能性が高い。1673は幅11.1cm、高さ10.2cm、厚さ1.1cmである。5個の破片が接合したもので、中央部は欠損する。外面にヘラミガキ、内面にはナデが施される。湾曲がほとんどみられないことから、弥生時代中期後半の大型壺の破片と考えられる。外面にはヘラミガキの上に建物の屋根・柱・部屋がヘラ描きされる。建物の屋根は台形で、屋根の内部は縦横方向の格子で埋められる。屋根の形状から桁行方向からみた寄棟造が描かれていることがわかる。屋根の頂点とその少し下には斜め上方向に延びる屋根飾りがある。側端に2個ずつで合計4個ある。屋根飾りは一重の渦巻き（下向きに巻く）である。屋根の下には部屋があり、部屋の両端から下に向かって1本線がのびる。柱を表現しているのであろう。両端に1本ずつ柱があり、桁行は1間である。柱の下端は欠損しているため、柱の長さは不明であるが、建物の幅に比べると、かなり長く、高床の建物と考えられる。柱は2本表現されているだけあるが、梁間も1間であろう。また、柱の上有る部屋の壁は斜格子で埋められている。斜格子は整然とした菱形ではなく、ややいびつな菱形である。ヘラ描きの順番を観察すると、最初に屋根の頂辺の横線を描き、次に側辺、その次に屋根の内部を埋める縦線または、屋根の下部にある柱を描く。屋根の輪郭の下辺の横線は柱のあとで、屋根の内部の横線は縦線のあとである。屋根飾りは屋根の輪郭のあとに描き、壁の床を表す横線は柱のあとである。屋根と柱の輪郭のあとに屋根の下辺を描くのは不自然ではあるが、建物は左右対称で、バランスよく描かれている。また、各縦線を観察すると右のほうが線刻が深いことから、右手で描いたことがわかる。

1892は数条の直線と斜線が描かれる。絵画全体の様相は不明であるので、建物と断定することはできないが、屋根と壁の部分を表している可能性が高い。

龍または魚（401・402）

401・402の絵画は龍または魚の可能性がある。いずれも小破片で全体は不明であるが、401はひれ状の突起が3個、402は突起が1個描かれる。これらは古墳時代後期の竪穴建物7-9区SH01から出土し

表11 絵画土器・記号土器一覧

報告書名	番号	器種	出土位置
旧練兵場遺跡V	80	弥生土器壺	7-2区 SH11
	308	弥生土器壺	7-7区 SH01
	310	弥生土器壺	7-7区 SH01
	399	弥生土器壺	7-9区 SH01
	400	弥生土器壺	7-9区 SH01
	401	弥生土器壺	7-9区 SH01
	402	弥生土器壺	7-9区 SH01
	593	弥生土器壺	7-13区 SH21
	858	弥生土器壺	7-7区 SP84
	990	弥生土器	7-14区 SP480
	1207	弥生土器壺	7-9区 SK02
	1337	弥生土器壺	SD0720
	1341	弥生土器壺	SD0719・SD0720
	1443	弥生土器壺	SD1410
	1449	弥生土器（不明）	SD1410
	1644	弥生土器壺	SD23
	1673	弥生土器壺	SD0704
	1694	弥生土器壺？	SD0704
	1892	弥生土器壺	SD34
旧練兵場遺跡IV	486	弥生土器（不明）	6-2区 SH08
	488	弥生土器（不明）	6-2区 SH07

ているが、重複する竪穴建物 SH09・SH11 は弥生時代後期のものであることから、これらの遺物は弥生時代後期に属する可能性が高い。

組帶文 (308・1449・1644・1694?)

308 は壺の頸部片で外面に横方向の直線、弧状の文様がある。308 が出土した 7-7 区 SH01 は弥生時代後期後半の竪穴建物であるので、308 は弥生時代後期のものと考えられる。1449 は破片で、器種不明であるが、外面には円弧と直線が描かれる。1644 は断面形が湾曲することから、壺の体部片であると考えられる。外面にはヘラ書きによる組帶文が施される。1694 は弥生時代後期の壺の頸部片である。破片であるため、文様の全体は不明であるが、組帶文の可能性が高い。

円弧 (310・1337・1443)

310 は壺の体部片である。外面には弧状の文様がある。弥生時代後期に属する。1337 は弥生時代中期後半の壺で、体部上半に 3 条 1 単位の円弧が 2 組ある。1443 は壺の頸部である。外面に円弧がある。

記号など (80・399・400・593・858・990・1207・1341)

80 は弥生時代後期前半の壺で、頸部と体部の境界付近に 4 条 1 単位の円弧のヘラ書きがある。399 は 1 本の縦方向の直線、400 は横方向の直線と V 字状のヘラ書きがある。横線のあとで V 字を描く。593 は弥生後期の壺の頸部片である。外面には横方向・縦方向の数条の弧状のヘラ書きがある。858 も壺の体部片である。横方向の円弧の上部に三角形状のヘラ書きがある。990 は壺の体部片である。斜めの直線と直交する数条の直線が描かれる。建物の可能性もある。1207 は壺の頸部に三角形状のヘラ書きがある。弥生時代後期のものである。1341 は壺の体部上半に葉状の円弧が描かれる。弥生時代中期後半のものである。また、体部には焼成時の失敗で生じた剥離痕があることから、付近で焼成された土器であると考えられる。

2. 絵画土器 (1673) に描かれた建物

1673 と他遺跡の絵画土器

建物を描いた絵画土器は全国で約 70 点出土している。表 13 はそのうちの 65 点を一覧にしたものである。この表をみると、建物を描いた絵画土器の器種は壺が多く、弥生時代中期後半に属するものが大半である。出土遺跡は近畿地方に集中しており、その中でも特に多いのが奈良県田原本町にある唐古・鍵遺跡である。県内では高松市久米池南遺跡、中国・四国地方では愛媛県今治市別名寺谷 1 遺跡、南国市田村遺跡、鳥取県米子市角田遺跡、岡山市新庄尾上遺跡、雄町遺跡、岡山県総社市窪木遺跡から出土している。なお、別名寺谷 1 遺跡は高杯、窪木遺跡は器台、その他は壺である。

1673 の建物は高床で、寄棟造と考えられる。表 13 で集成した絵画土器のうち屋根構造がわかるもので寄棟造は 29 点、切妻造は 39 点である。切妻造の建物を表現しているもののほうがやや多いが、寄棟



図 300 建物を描いた絵画土器 (1673)

造は珍しいものではない。だが、屋根の内部を埋める縦横格子はほとんど例がなく、はっきりとわかる例は奈良県田原本町多遺跡（59）だけである。奈良県橿原市四分遺跡（63）は縦横格子といえなくもないが、縦線が斜めになっており、整然とした縦横格子ではない。そのほか、岡山県雄町遺跡の絵画（8）は全体がわからないが、建物屋根であれば縦横格子の可能性が高い。建物屋根の内部全体に斜格子が描かれるものは表13では57点で、大部分を占めるが、愛媛県別名寺谷1遺跡（3）、鳥取県角田遺跡（5）、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡第47次・77次（28）、田原本町・天理市清水風遺跡第2次（51・55）、田原本町法貴寺斎宮前遺跡（58）、京都市烏丸綾小路遺跡（64）、大阪府泉南市男里遺跡（65）は斜線または縦線である。なお、縦横格子の多遺跡（59）は1673と同じく寄棟造である。

また、1673の屋根の両端には一重の渦巻きの屋根飾りがある。絵画土器の屋根飾りの形状は渦巻き・円弧のほか、短い直線があるが、渦巻あるいは円弧状の屋根飾りのある建物の絵画が最も多いのが唐古・鍵遺跡で9点ある。次に多いのが唐古・鍵遺跡に隣接する清水風遺跡の5点である。近県では岡山県の新庄尾上遺跡（6）、兵庫県の養久山・前地遺跡（11）がある。1673の屋根飾りの渦巻きは下方に向いているが、同じように下向きの渦巻の屋根飾りをもつものは奈良県田原本町の八尾九原遺跡（60）だけである。八尾九原遺跡は唐古・鍵遺跡や清水風遺跡の近隣の遺跡である。なお、渦巻あるいは円弧状の屋根飾りをもつ屋根の形状をみると寄棟造13、切妻造13で、同数である。屋根の形状にかかわらずこのような屋根飾りが表現されることがわかる。

1673の屋根の下には部屋の壁が描かれる。屋根の下に床があり、内部が斜格子で埋められる。壁が描かれるのは愛媛県別名寺谷1遺跡（3）がある。内部は縦横格子で、1673とは格子の方向が異なる。また、1673や別名寺谷1遺跡とは少し異なるが、鳥取県角田遺跡（5）では壁と思えるような表現がある。斜格子で内部を埋めた長方形が屋根の下にあるが、この下に柱ではなく、屋根から壁が吊り下げられたように描かれている。1673以外で壁の表現をしているのはこの2例だけである。なお、久米池南遺跡（2）、新庄尾上遺跡（6）、唐古・鍵遺跡（28）には屋根の下方に床が描かれているが、壁の表現はみられない。吹き抜けを表現しているのであろうか。

また、1673では部屋の下には2本の柱がある。下端は欠損しているが、桁行1間梁間1間の高床であることは間違いない。桁行1間梁間1間の高床建物を描いた例は少なく、角田遺跡（5）、唐古・鍵遺跡（28）の2例があるだけである。なお、唐古・鍵遺跡（49）には4本の柱が描かれる。桁行1間梁間1間の可能性もある。なお、角田遺跡（50）、唐古・鍵遺跡（28）の屋根構造は1673と同様寄棟である。

1673の特徴と類例をまとめると、1673に描かれた建物は下向きの渦巻の屋根飾りをもつ梁間1間・桁行1間の高床建物で、寄棟造と考えられる。全く同じ絵画を描いた土器はないが、部分的に似ている絵画はいくつかみられる。寄棟造で、桁行1間梁間1間の高床建物の絵画は唐古・鍵遺跡（28）、角田遺跡（5）がある。壁をもつ建物は最も数多く建物の絵画土器が出土している奈良県唐古・鍵遺跡や清水風遺跡ではみられないが、隣県の別名寺谷1遺跡（3）がある。また、渦巻あるいは円弧状の屋根飾りをもつ建物が最も数多く出土しているのは全国の建物の絵画土器出土例の半数以上を占める奈良県唐古・鍵遺跡、清水風遺跡であるが、両遺跡には下向きの渦巻ではなく、このような屋根飾りがあるのは八尾九原遺跡（60）だけである。

建物の絵画だけではなく、弥生時代の絵画の大半は弥生時代中期後半のもので、全国で600点以上出土しているが、中でも唐古・鍵遺跡では350点以上、清水風遺跡では50点ほどの絵画土器が出土しており、全国の弥生遺跡のなかで突出している⁽¹⁾。絵画はここで紹介した建物だけではなく、動物や人物な

どを画材としたものがある。動物や人物も数本の線だけで簡略に描かれているにもかかわらず、わかりやすく、適格に表現しており、これらの遺跡の人々は土器に絵を描くことに手馴れていることがわかる。おそらく建物も動物や人物と同様適格に表現していると思われる。橋本裕行氏も唐古・鍵遺跡から出土した「樓閣」絵画（図304、表13の28）は「迷いのない手慣れたタッチ」で描かれており、作者の描写能力はきわめて高く、作者はモデルとした建物そのもの、もしくは、それに類似した建物を見た経験があると考えられ、唐古・鍵遺跡の「樓閣」絵画のモデルとなった建物は唐古・鍵遺跡内に存在した可能性が高いと指摘している⁽²⁾。旧練兵場遺跡1673と同じ絵画は他遺跡にはないことから、唐古・鍵遺跡などから運ばれてきた絵画土器を模写して建物を描いたとは考え難く、実際にある建物を見て描いたものと思われる。また、数本の線だけで簡略に描かれているにもかかわらず、適格に表現されていることから、絵画土器が多数出土している遺跡での絵画の描き方の影響を受けて、実在する建物を描いたと考えられる。しかし、唐古・鍵遺跡や清水風遺跡の絵画土器とは屋根の内部の格子の方向などが異なることから、これらの遺跡での描き方の影響を直接受けたものではなく、八尾九原遺跡や別名寺谷1遺跡をはじめとする各地の遺跡の影響を受けて描かれたのであろう。

2. 旧練兵場遺跡の掘立柱建物と建物を描いた絵画土器（1673）

旧練兵場遺跡（1673）の絵画のモデルとなった建物はどのようなものであろうか。旧練兵場遺跡では弥生時代中期後半の1間×1間の掘立柱建物は10棟検出されている（表14）。これらの建物の柱穴間の距離は梁間2.5～4.7m、桁行3.5～6.3m、柱穴の掘り方は平面形方形または円形、1辺0.8～1.5mである。旧練兵場遺跡の1間×1間の掘立柱建物は他の弥生時代遺跡で一般的なものかどうかを検討するために香川県内の掘立柱建物の一覧表（表15）を作成し、比較した。これをもとに県内の弥生時代の1間×1間の掘立柱建物と旧練兵場遺跡の1間×1間の掘立柱建物との規模の比較をしたのが表12上段である。表の横軸は梁間、縦軸は桁行である。旧練兵場遺跡の掘立柱建物は◆、その他は灰色の丸で表している。これをみると、旧練兵場遺跡の掘立柱建物は他遺跡の建物と比べると、梁間・桁行ともに長く、規模が大きいことがわかる。旧練兵場遺跡の中でも最も規模の大きな建物は善通寺病院調査区の中でも南端近くで検出されたII-1区SB1004（梁間4.7m、桁行5.9m）・I-2区SB2001（梁間4.2m、桁行6.3m）である。次に大きいのは同じ善通寺市内にある西碑殿遺跡SB14（梁間4.3m、桁行5.6m）である。SB14も弥生時代中期後半の建物で旧練兵場遺跡の建物とほぼ同時期である。これらの3棟はずば抜けて大きい。また、表12中段は1間1間に限らず、香川県内で検出された弥生時代の掘立柱建物と大きさを比較したグラフである。この表に掲載した建物は1間×2間～1間×6間、2間×2間～2間×7間の建物である。この表をみると旧練兵場遺跡1間×1間の建物の梁間は梁間1間の建物の中では最も長いことがわかる。また、表12下段は旧練兵場遺跡で検出された掘立柱建物の表である。梁間の長さを比較するとやはりII-1区SB1004・I-2区SB1002の梁間は長いが、他の1間×1間の建物は桁行2間以上の建物と梁間の長さはほぼ同じであることがわかる。以上のように旧練兵場遺跡では10棟の梁間1間桁行1間の掘立柱建物が検出されているが、香川県内の他遺跡の建物と比べると大きく、その中でもII-1区SB1004・I-2区SB2001が群を抜いて大きいことがうかがわれる。なお、II-1区SB1004の柱穴掘り方は短軸1.5～2.0m、長軸1.3～1.6m、柱痕の直径0.3～0.35m、I-2区SB1002の柱穴掘り方は1辺1.3～1.8m、柱痕の直径0.2～0.25mと大きい。

1673に建物の絵を描いた人物はこのような旧練兵場遺跡の建物を描いたものと考えられるが、特に

大きな建物であるⅡ-1区SB1004・Ⅰ-2区SB2001をモデルとしたのではないかと思われる。また、Ⅱ-1区SB1004・Ⅰ-2区SB2001は旧練兵場遺跡の中でも南部に位置し、最も標高の高いところに位置している。これらの建物は柱が長い高層建築物であり、旧練兵場遺跡の人々は小高いところに建てられたこの「特別な」高い建物を見上げていたのであろう。なお、寄棟造で桁行1間梁間1間の高床建物が描かれている絵画土器が出土した唐古・鍵遺跡、角田遺跡では1間×1間の掘立柱建物はまだ検出されていない。今後の調査で見つかる可能性が高い。

註1 『弥生の絵画』田原本町教育委員会 2006

2橋本裕行「『楼閣』絵画の再考」『原始絵画の研究 論考編』設楽博己編 六一書房 2006

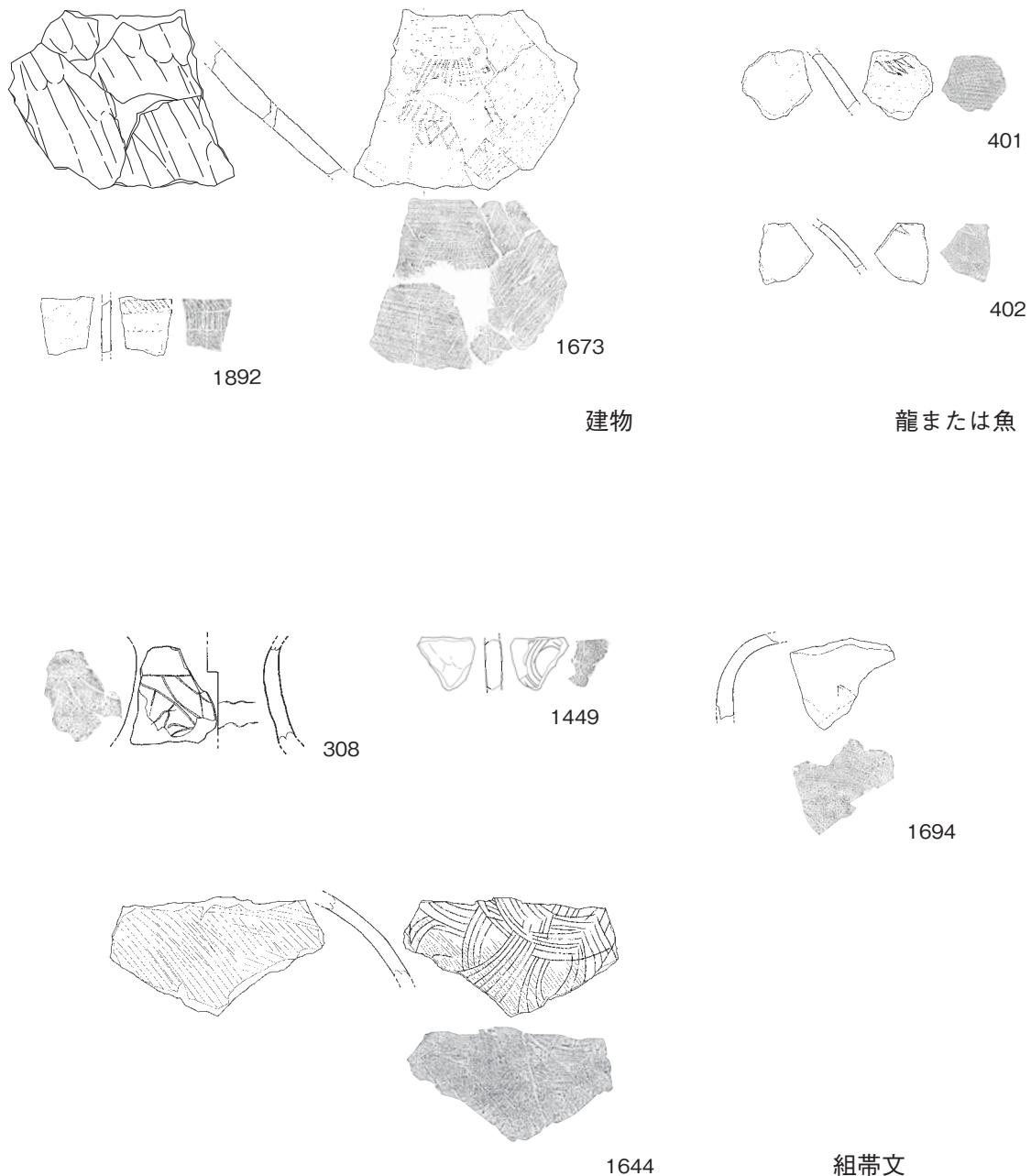
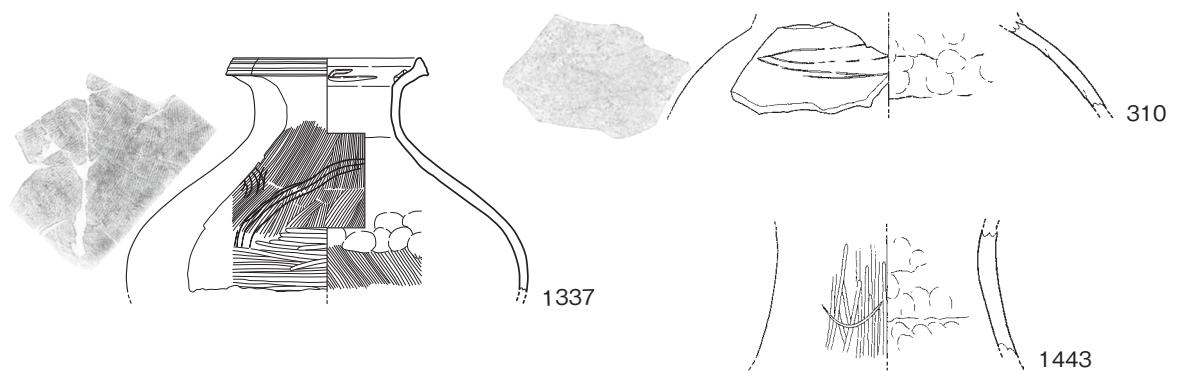
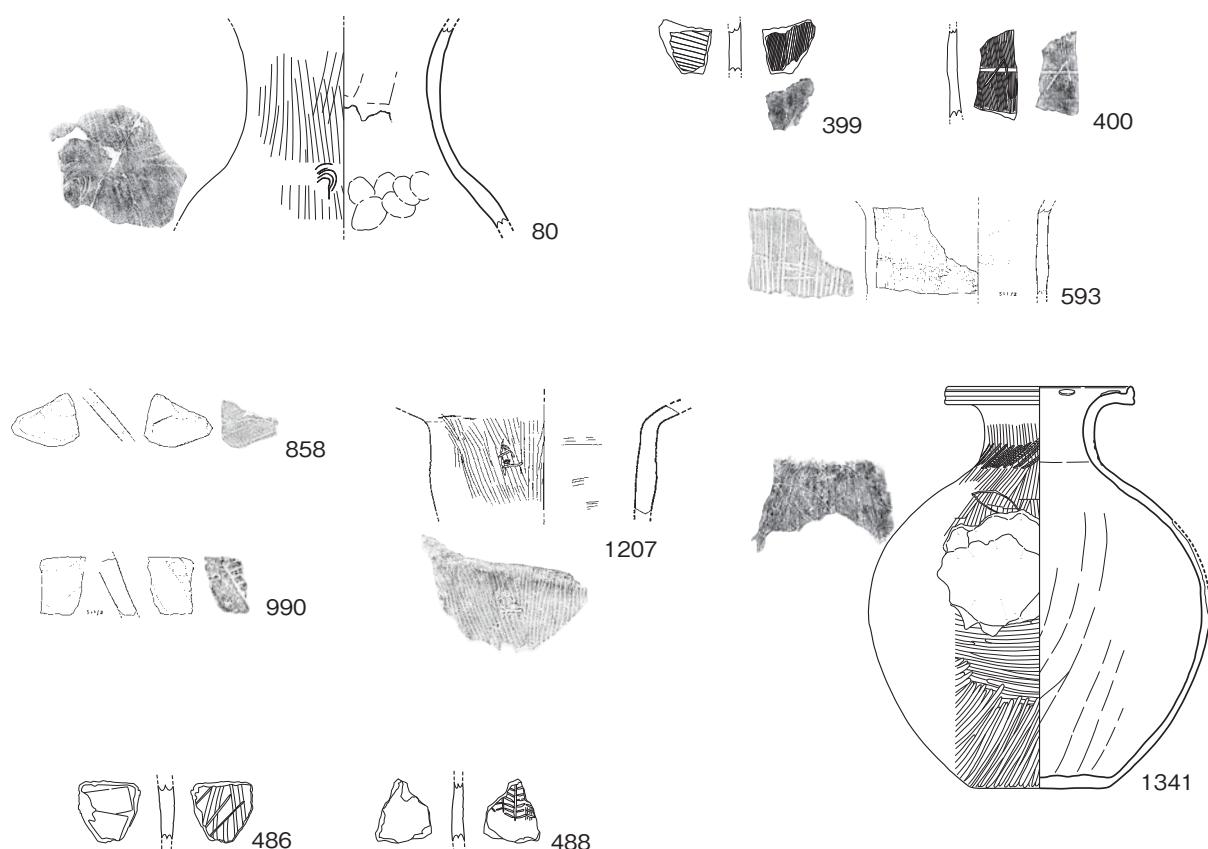


図301 旧練兵場遺跡（第28次調査）の絵画土器・記号土器(1)



円弧



『旧練兵場遺跡IV』掲載

記号など

図 302 旧練兵場遺跡（第 28 次調査）の絵画土器・記号土器(2)

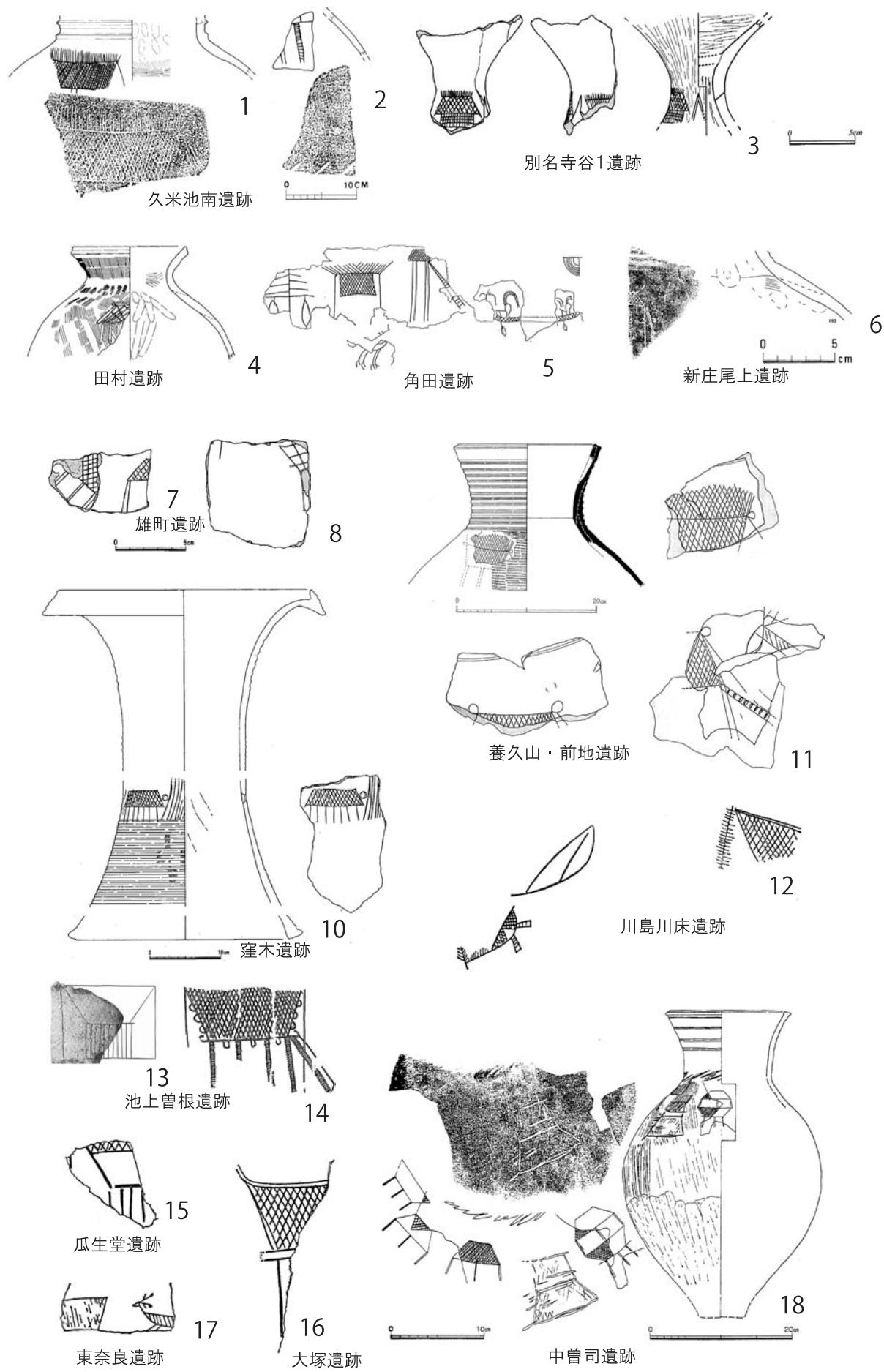
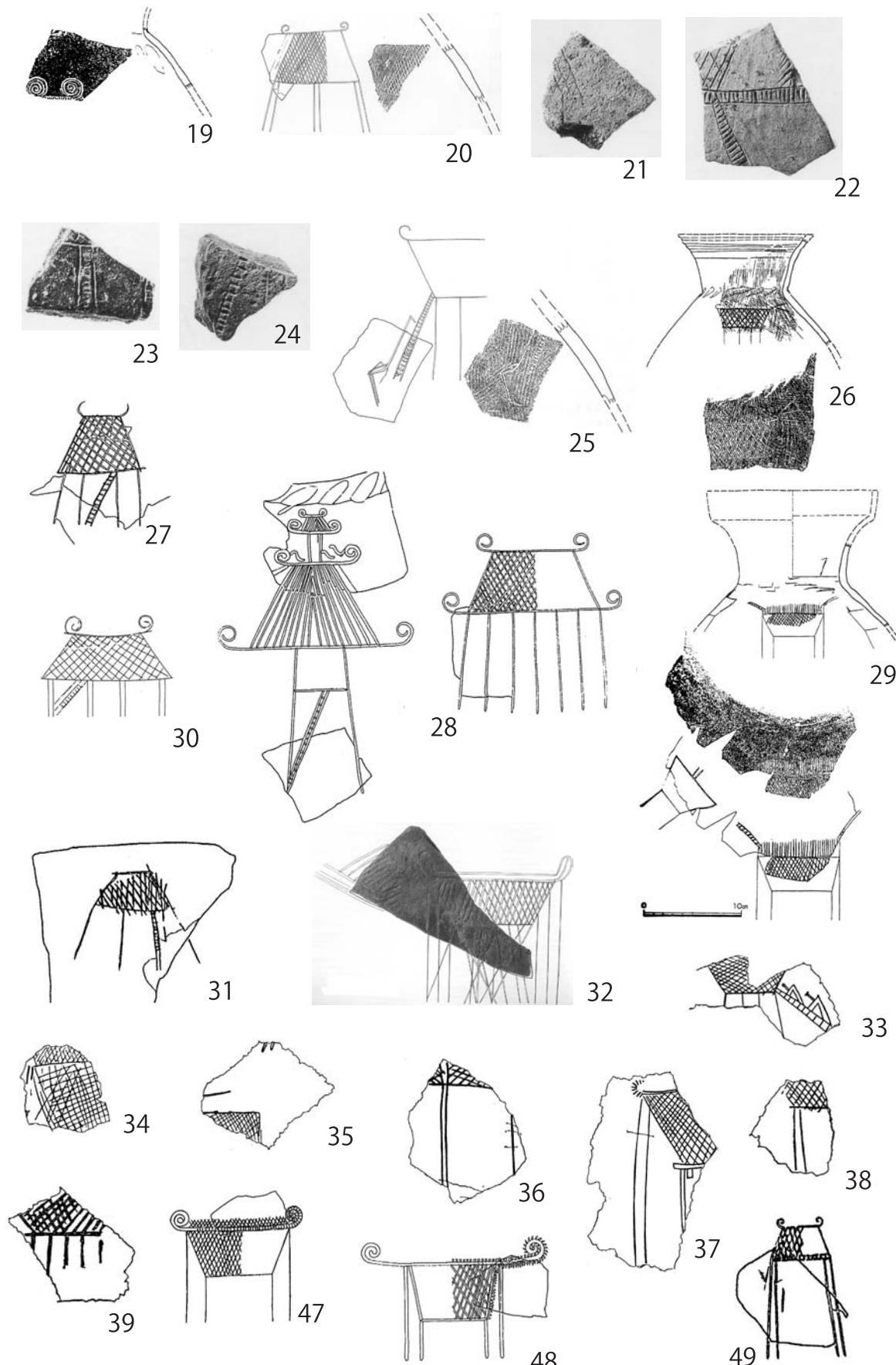


図 303 建物を描いた絵画土器 (1)



19 ~ 48 唐古・鍵遺跡

49 清水風遺跡

図 304 建物を描いた絵画土器 (2)

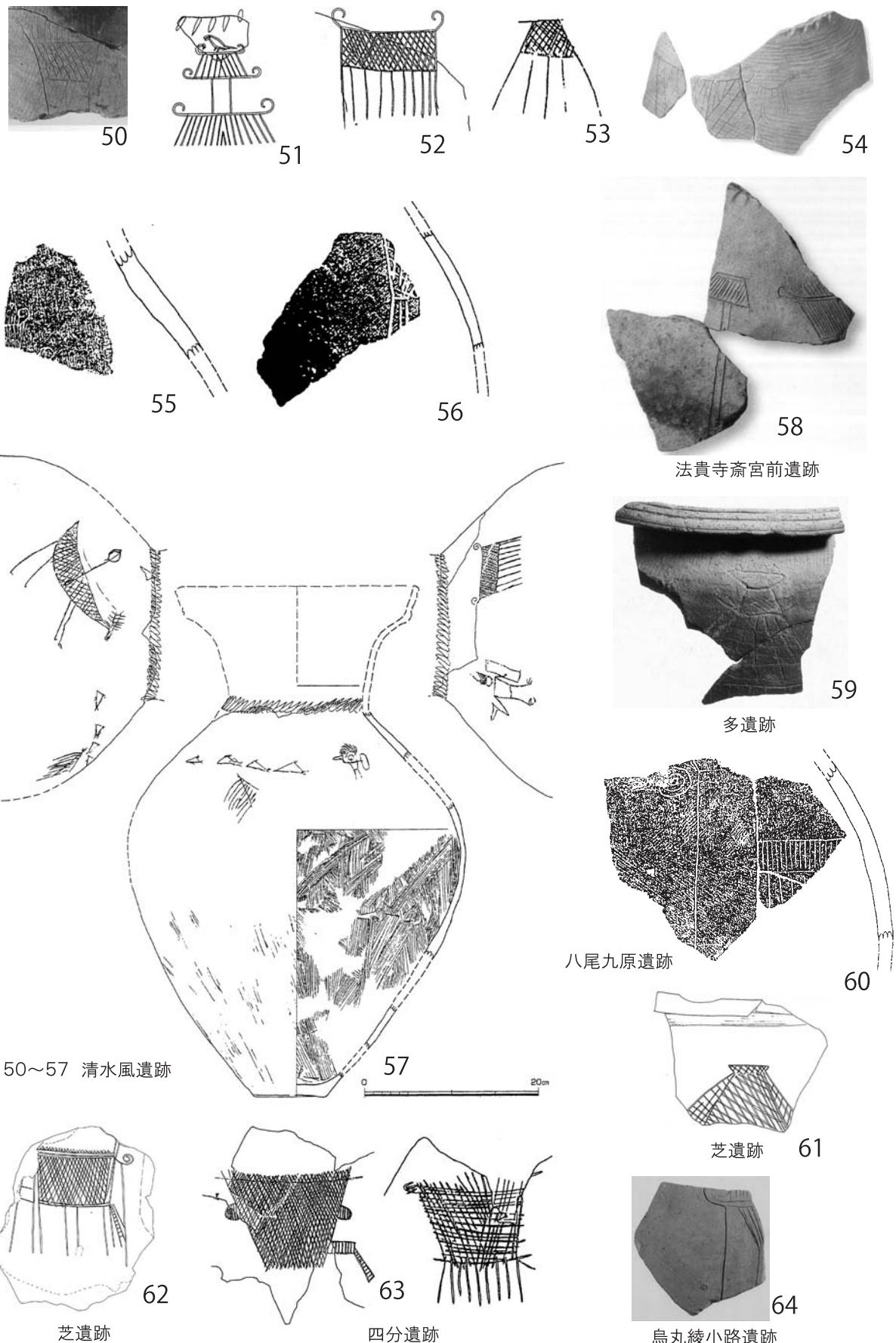
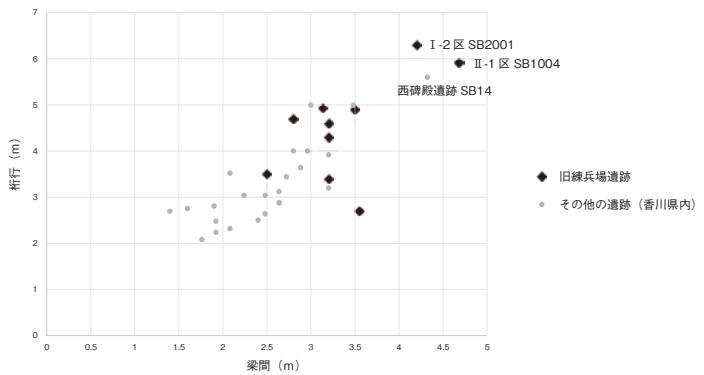


図 305 建物を描いた絵画土器 (3)

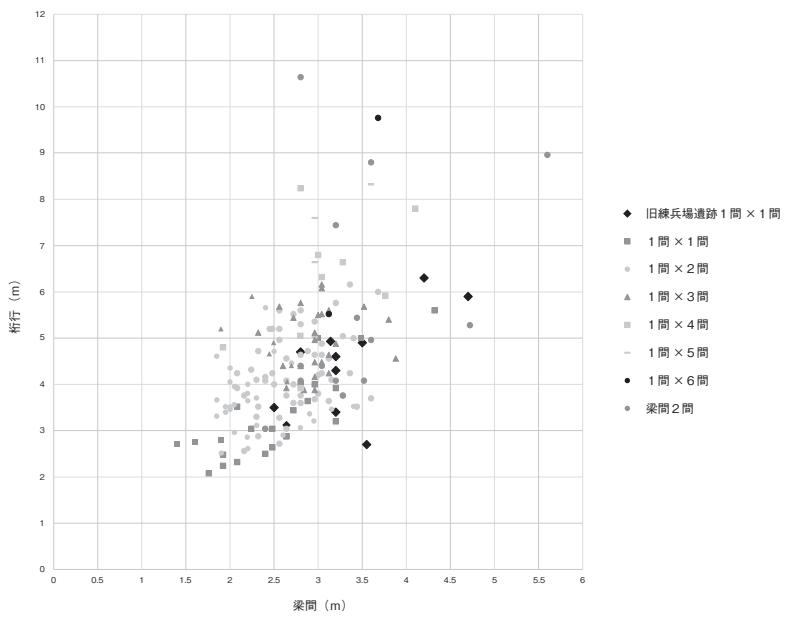


図 306 1間×1間の掘立柱建物跡と絵画土器(建物)出土地点

旧練兵場遺跡 1間×1間掘立柱建物とその他の遺跡（香川県内）の1間×1間掘立柱建物



旧練兵場遺跡 1間×1間掘立柱建物とその他の遺跡（香川県内）の掘立柱建物



旧練兵場遺跡の掘立柱建物

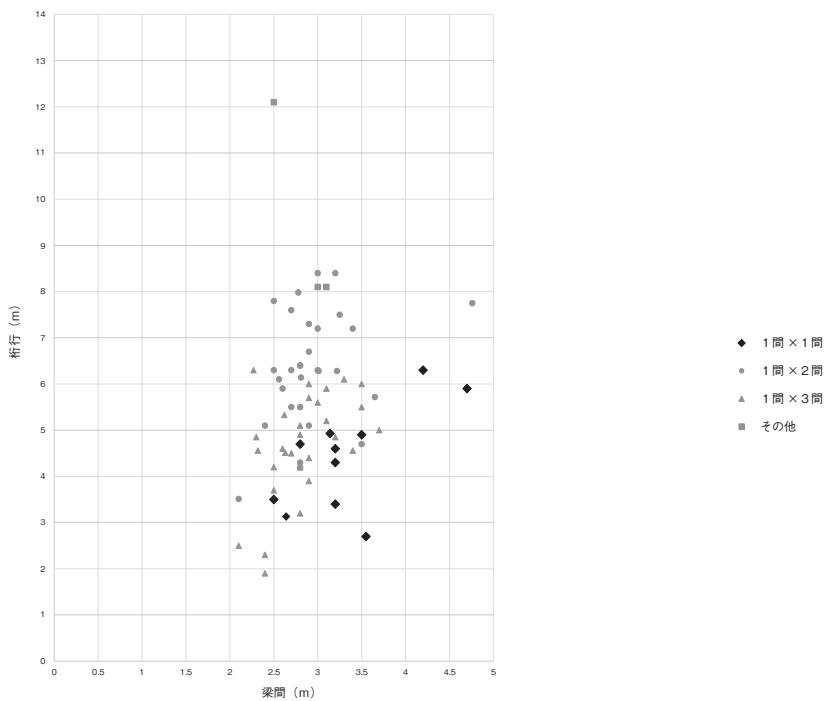


表 12 掘立柱建物の規模

表13 絵画土器（建物）一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査番号など	備考	柱				梯子				文獻（太字は図の引用文献）							
					屋根構造	屋根の表現	屋根	屋根飾り	壁	棟持柱	柱の数	梯子	柱	屋根構造	屋根の表現	屋根	屋根飾り	壁	棟持柱	
1	久米地 久米遺跡	香川県 高松市	壇 体部	弥生時代 中期後半	建物（屋根） 切妻造 斜格子	多数の 縦線	無	1?	現存1?	—	1・2は同一個体の可能性高い、 「久米地南遺跡発掘調査報告書」高松市教育委員会1989									
2	久米地 久米遺跡	香川県 高松市	壇 体部	弥生時代 中期後半	建物（住・ 椅子） 切妻造	—	—	壁？吹き 抜け？	—	現存1	1・2は同一個体の可 能性高い。2は高床	「久米地南遺跡発掘調査報告書」高松市教育委員会1989								
3	別名寺谷 1遺跡	愛媛県 今治市	高杯脚部	弥生時代 中期	建物2棟 寄棟造	縦線	無	—	無	—	—	「別名寺谷Ⅰ遺跡 別名寺谷Ⅱ遺跡 別名寺谷Ⅲ遺跡」財团法人愛媛県埋蔵文化財調査センター-2007								
4	田村遺跡	高知県 南国市	壇 体部	弥生時代 後期	建物	寄棟造	斜格子	無	無	—	現存3	—	「田村遺跡群Ⅱ」高知県教育委員会（財）高知県埋蔵文化財整理 文化財センター-2004							
5	角田遺跡	鳥取県 米子市	壇	弥生時代 中期	建物2棟	寄棟造	斜格子	無	無	—	2(2本線で表現)	—	「角田遺跡」高知県埋蔵文化財整理 「弥生土器絵画における家屋の表現」『國立歴史民俗博物館研究報告第7集』國立歴史民俗博物館1985							
6	新生尾 上遺跡	岡山県 岡山市	壇	弥生時代 中期後半	建物	寄棟造	斜格子	円弧？ 吹き抜け？	—	現存3または 2(2本線)	有?	高床	「新生尾上遺跡」岡山市教育委員会2009							
7	雄町遺跡	岡山県 岡山市	壇	弥生時代中 期後半～ 後期	建物2棟	寄棟造	斜格子	—	無	—	現存1本(2本線)	—	「雄町遺跡」岡山県教育委員会1997							
8	雄町遺跡	岡山県 岡山市	壇	弥生時代中 期後半～ 後期	屋根・柱？ 切妻造？ 斜格子？	—	—	無	—	現存1本?	—	高床	「雄町遺跡」岡山県教育委員会1997							
9	南方遺跡	岡山県 岡山市	分離形 土製品	弥生時代 中期後半	建物	切妻造	斜格子	無	無	2(1本線)	—	高床	「岡山県埋蔵文化財調査の概要」1994(平成6年度)岡山 市教育委員会1996							
10	塙木遺跡	岡山県 総社市	器台	弥生時代 中期後半	屋根・柱	寄棟造	斜格子	無	無	—	無	—	「塙木遺跡」岡山県教育委員会1997							
11	養久山・ 前地遺跡	兵庫県 たつの市	壇 肩部	弥生時代 中期後半	建物3棟	切妻造 寄棟造	斜格子	無	円	—	7(1本線)	無	「養久山・前地遺跡」龍野市教育委員会1995							
12	川島川 床遺跡	兵庫県 太子町	壇 肩部	弥生時代 中期中葉	屋根・棟 持柱？ 切妻造？ 斜格子？	無	無	—	現存1?	—	—	—	中津康則「兵庫県揖保郡太子町川島川床遺跡出土の弥生中期 絵画土器」『考古学雑誌』第66巻1号 1980 金闇忍「弥生土 器絵画における家屋の表現」『國立歴史民俗博物館研究報告 第7集』國立歴史民俗博物館1985							
13	池上曾 根遺跡	大阪府 和泉市	壇	弥生時代 中期末	建物	切妻造	—	—	無	現存1	現存8	—	高床	佐原真・春成秀爾「原始社会」講談社1997						
14	池上曾 根遺跡	大阪府 和泉市	壇	弥生時代中 期	建物	切妻造	斜格子	—	屋根端 に円形 飾り 現存6	2本	柱4	有	高床	藤田三郎「土器に描かれた弥生の建物」「弥生のすまいを探る」 鳥取県教育委員会2004						
15	瓜生堂 遺跡	大阪府東 大阪市	壇	弥生時代 中期	屋根・柱？ 切妻造？ 斜格子？	—	—	無?	現存1?	現存4?	—	—	中津静人「瓜生堂遺跡の原始絵画」『考古学雑誌』第66巻 1号 1980 金闇忍「弥生土器絵画における家屋の表現」『國立歴史民俗博物館 研究報告第7集』國立歴史民俗博物館1985							
16	大坂遺跡	大阪府 高槻市	壇	弥生時代 中期後半	屋根・柱	切妻造	斜格子	無	直線	—	無	—	塙見勇・福岡澄男「大阪文化誌第12号 1984 金闇忍「弥生土 器絵画における家屋の表現」『考古学雑誌』第66巻1号 1980 金闇忍「弥生土 器絵画における家屋の表現」『國立歴史民俗博物館研究報告第7 集』國立歴史民俗博物館1985							
17	東奈良 遺跡	大阪府 茨木市	鉢 体部	弥生時代 中期後半	屋根？ と鹿	切妻造？ 斜格子？	無	無	—	—	—	—	奥秀哲「東奈良遺跡出土の絵画土器」『考古学雑誌』第66 巻1号 1980 金闇忍「弥生土器絵画における家屋の表現」『國立歴史民俗博物館 研究報告第7集』國立歴史民俗博物館1985							

番号	遺跡名	所在地	調査番号など	器種	時期	内容	屋根		壁	棟持柱	柱の数	梯子	備考	文献（太字は図の引用文献）
							屋根構造	屋根の表現						
18	中曾司 遺跡	奈良県 橿原市	第7次	壺 体部	弥生時代 中期後半	建物 6 棟	寄棟造 切妻造	斜格子 無	無	無	現存 2 (推定 3)	—	—	「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会 2003
19	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第61次	短頸壺 体部上半	弥生時代 後期前半	屋根・柱	寄棟造	斜格子 無	無	無	現存 2 (推定 3)	—	—	—
20	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	壺	壺 体部上半	弥生時代 中期後半？	屋根・柱	寄棟造	斜格子 —	—	—	—	—	—	—
21	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	壺	壺 体部上半	弥生時代 後期後半？	屋根・柱	寄棟造	斜格子 —	有 温巻 かどう か不明	—	現存 1 (2本継) または 2	—	—	「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2008 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2004 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2008 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2004 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2004
22	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	壺	壺 体部上半	弥生時代 中期後半？	屋根・柱	切妻造？	斜格子 —	—	—	—	—	—	—
23	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	壺	壺 体部上半	弥生時代 後期後半？	屋根・柱？	斜格子 —	—	—	—	現存 2 (2本継 中 を横断 で充填)	—	—	「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2008 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2008 「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2004
24	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	壺	壺 体部上半	弥生時代 後期後半？	柱・梯子	—	—	—	—	現存 2	有	高床	—
25	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第69次	壺 体部	弥生時代 中期後半	鳥・梯子	—	—	—	—	—	—	—	「田原本町文化財調査報告書 第5集 唐古・鏡遺跡 I」田原本町教育委員会 2008 「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会 2003 「弥生の建物～唐古・鏡遺跡と清水風遺跡～」田原本町文化財調査委員会 2006 藤田三郎「土器に描かれた弥生の建物」鳥取県教育委員会 2004 「唐古・鏡考古学ミユージアムコレクション」鳥取県教育委員会 2011 年度 藤田三郎「土器に描かれた弥生の建物」鳥取県教育委員会 2004
26	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第73次	壺	弥生時代 中期後半	建物・庵	切妻造	斜格子 無	半円の 円弧	無	現存 4	—	—	—
27	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第33次	壺 体部	弥生時代 中期後半	建物	寄棟造	斜格子 無	半円の 円弧	無	—	4	有	高床
28	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第47次・ 77次調査	壺 体部	弥生時代 中期後半	建物	寄棟造	縦縛 無	渦巻	吹きぬ け？	—	2	有	高床 2階建て 「唐古・鏡考古学ミユージアムコレクション」鳥取県教育委員会 2007 「弥生の建物～唐古・鏡遺跡と清水風遺跡～」田原本町教育委員会 2006 藤田三郎「土器に描かれた弥生の建物」「弥生の建物」「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会 2004
29	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第59次	壺 体部	弥生時代 中期中頃	3棟の建 物と船	寄棟造	斜格子 無	縦縛 2 本	—	—	—	—	「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会 2003 「弥生のすま いを探る」鳥取県教育委員会 2004 「弥生の絵画～唐古・鏡遺跡と清水風遺跡～」田原本町教育委員会 2006 藤田三郎「土 器に描かれた弥生の建物」「弥生の建物～唐古・鏡遺跡と清水風遺跡～」田原本町教育委員会 2006 「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会 2004 「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会 2006 「唐古・鏡考古学ミユージアムコレクション」田原本町教育委員会 2006 「唐古・鏡考古学 ミュージアムコレクション」アム 2010
30	唐古・ 鏡遺跡	奈良県田 原本町	第22次 調査(ほか、 第22次調査)	壺 体部	弥生時代 中期後半	建物など 庵	寄棟造	斜格子 無	上部両端 (渦巻き)	—	—	—	有	高床

番号	遺跡名	所在地	調査番号など	留置種	時期	内容	屋根		屋根飾り		柱	柱持柱	柱の数	梯子	備考	文献(大字は図の引用文献)	
							屋根構造	屋根の表現	棟	棟の端部							
31	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第76次調査			建物	寄棟造	斜格子	無	無	4	有	高床			藤田三郎「土器に描かれた弥生の遺物」「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会 2004 「弥生の絵画～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡と清水風遺跡の土器絵画～」田原本町教育委員会 2006	
32	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第3次調査			建物	切妻造	斜格子	無	長梢円	無	現存1	多数	—			藤田三郎「土器に描かれた弥生の遺物」「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会 2006
33	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第1次			建物	人物	斜格子	—	—	無	4	有	高床			未永雅雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 久野邦雄「唐古・鍵遺跡出土の土器」『考古学雑誌』第66巻1号 1980 金閥惣「弥生土器絵画～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡と清水風遺跡の土器絵画～」国立歴史民俗博物館 1985
34	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第1次			屋根	—	斜格子	—	—	—	—	—	—			未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
35	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第1次			建物?	—	斜格子	無	—	—	無	—	—	—		未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
36	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第1次			建物?	—	斜格子	—	—	—	無	—	—	—		未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
37	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町		臺	体部	弥生時代中期後葉	建物	切妻造	斜格子	無	半円の円弧	無	現存1(2本線)	現存1(2本線)	—		未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
38	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町		臺	体部	弥生時代中期後葉	建物	切妻造	斜格子	—	—	無	—	—	現存1(2本線で表現)		未永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」京都大学文学部考古学研究報告第16冊 1943 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
39	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町															網干善教「高床式建築考」「近畿考古学論刊」1963 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
40	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第52次														網干善教「高床式建築考」「近畿考古学論刊」1963 金閥惣「弥生土器絵画における家の表現」国立歴史民俗博物館 1985
41	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第58次			屋根	—	—	切妻造?	斜格子	無	直線2本	—	—	—		平成4年度唐古・鍵遺跡第52次発掘調査報告 田原本町教育委員会 1993
42	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町										—	直線	—	—		
43	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町										—	無	5	—		高床の可能性高い
44	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第59次			屋根	—	—	切妻造?	斜格子	—	—	無	—	—		
45	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第92次			屋根	—	—	切妻造?	斜格子	—	—	—	1?	—		
46	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第1次			屋根	柱・梯子?	—	—	—	—	—	—	—	現存4(2本線で表現)		
47	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第22次			屋根	—	—	切妻造?	斜格子	—	—	—	—	—		
48	唐古・鍵遺跡	奈良県田原本町	第62次			屋根	—	—	切妻造?	斜格子	—	—	—	—	—		
49	清水風遺跡	奈良県田原本町・天理市	第2次			屋根	柱	寄棟造	斜格子	—	—	無	2(2本線)または4	無	高床		藤田三郎「土器に描かれた弥生の建物」「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会 2004 「弥生の絵画～唐古・鍵遺跡と清水風遺跡の土器絵画～」田原本町教育委員会 2006

番号	遺跡名	所在地	調査番号など	器種	時期	内容	屋根		壁	柱持柱	柱の数	梯子	備考	文献（太字は図の引用文献）	
							屋根構造	屋根の表現							
50	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市	第1次	壺	船と建物	切妻造	斜格子	縦線多數	無	無	3	無		「弥生の会画～唐古・鏡遺跡と清水風遺跡の土器会画～」田原本町教育委員会2006	
51	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市	第2次	壺	弥生時代 中期後半	屋根	寄棟造	縦線？	無	半円の 渦巻	—	—	—	「田原本町埋蔵文化財調査年報 1996年度」田原本町教育委員会1997 「奈良県の弥生の建物」「土器に描かれた弥生の建物」「奈良県の弥生土器集成」鳥取県教育委員会2004 「大和弥生文化の会」2003	
52	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市	第2次			屋根・柱	寄棟造？	斜格子	無	弧状	無	10	無	高床の可能性高い	
53	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市			建物	寄棟造	斜格子	無	無	無	5	無	高床の可能性高い	「田三郎「土器に描かれた弥生の建物」「弥生のすまいを探る」 「鳥取県教育委員会2004」	
54	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市		壺	屋根	寄棟造？	斜格子— 筋斜線	無	円	—	—	—	—	「弥生工ッセンス」唐古・鍵考古学ミュージアム2011	
55	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市	第2次		屋根	切妻造？	縦線	—	渦巻	—	—	—	—	「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会2003	
56	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市			弥生時代 中期後半	屋根・柱	切妻造？	斜格子	—	—	—	—	—	「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会2003	
57	清水風 遺跡	奈良県田原本町・ 天理市			弥生時代 中期後半	建物	寄棟造？	斜格子	無	渦巻	無	10	—	高床の可能性高い	
58	法事吉 宮前遺跡	奈良県田原本町			建物2棟	寄棟造	斜線	無	無	11(2本線)または2 いびつ な円形	—	—	—	「弥生工ッセンス」唐古・鍵考古学ミュージアム2011 「奈良県立橿原考古学研究所2008 「太安万侖のふるさと」唐古・鍵考古学ミュージアム2007	
59	多遺跡	奈良県田原本町			建物	寄棟造	縦横格子+ 半円4個	直線2	無	—	—	現存5	—	「田原本町埋蔵文化財調査年報 1996年度」田原本町教育委員会2003 「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会2004 「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会2003 「桜井の弥生時代」桜井市立埋蔵文化財センター1999	
60	八尾九 原遺跡	奈良県田原本町			弥生時代 中期後半	建物	切妻造	—	—	渦巻(下 向き)	—	—	—	高床の可能性高い	
61	芝遺跡	奈良県橿原市				屋根	寄棟造	斜格子	無	—	—	—	—	柱埋在5 (推定多数)	
62	芝遺跡	奈良県橿原市	壺			建物	切妻造？	斜格子	渦巻	無	2	6	有	高床	
63	四分遺跡	奈良県橿原市		大型細 頸壺	弥生時代 中期中頃	建物2棟	切妻造	斜格子	無	側線に 半円形 頁辺の 片方に 半円形	無	無	有?	「奈良県の弥生土器集成」大和弥生文化の会2003 「土器に描かれた弥生の建物」「弥生のすまいを探る」鳥取県教育委員会2004	
64	烏丸縁小 路遺跡	京都府 京都市				切妻造	縦横格子	無	無	—	9	無		「京都府内遺跡立会調査概報 平成4年度」(財)京都府埋蔵 文化財研究所2003	
65	男里遺跡	大阪府 泉南市			弥生時代 中期末	建物3棟	寄棟造	縦線	縦線多數	渦巻	—	現存1	—	高床の可能性高い	「弥生画帖 弥生人が描いた世界」大阪府弥生文化博物館 2006